



Vol. 49

PROFILE

1977年大阪府出身。高校卒業後、同志社大学に進学し、学業と両立してガンバ大阪でプロサッカー選手として活躍。2002年、06年のFIFAワールドカップでは日本代表キャプテンを務める。2011年に現役引退し、「FIFAマスター」を修了。現在は、日本サッカー協会国際委員、日本プロサッカーリーグ特任理事を務め、解説者としても活躍。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。

プロサッカー選手として17年間過ごし、引退後はピッチの外からスポーツに貢献したいと思いました。その第一歩として、国際サッカー連盟（FIFA）がスポーツ研究国際センター（CIES）と提携し運営する大学院「FIFAマスター」に進学。自分が進むべき道筋を描くためにも、スポーツをあらゆる観点から学びたいと考えました。

世界各地からさまざまな職業の人が集まってくる「FIFAマスター」は、とても刺激的な場でした。コースの最後には、修士論文の一環として仲間たちと共同研究に取り組むことになり、僕たちが選んだテーマは「ボスニア・ヘルツェゴビナにスポーツ・アカデミーは設立できるか」。メンバーの一人の出身国であったことから、長年の紛争の影響で民族が対立したままにあることを知りました。ボール一つあれば、人と人を前向きにつなげることができるサッカーこそ、民族融和の一助となるのではないかと思ったのです。

ボスニアと日本が国際協力を通じてつながってきたこともあり、今年2月に念願



の訪問がかないました。研究の対象にしたのは、いまだ民族の対立が根深く残るモスタル。街中には日の丸が描かれたバスが走っていて、一気に身近に感じました。他方、民族間の問題はそう容易に解決できるものではないことを実感しました。橋を隔てて街が分断され、ムスリム系、クロアチア系、セルビア系の人々が暮らしている状況を目の当たりにしたからです。10年前と比べると感情的な対立は少なくなりつつあるようでしたが、いまだ超えられない民族間の壁が立ちはだかっていました。

それでもスポーツが果たすべき役割があると信じ、地元の子どものためのサッカー大会を開きました。日本でも「ミヤモト・フットボール・アカデミー」で小学生を指導していますが、一つ一つのプレーに国民性が出ておもしろい。日本人はフェアプレーの精神が強みですが、ボスニアの選手のプレーには気持ちの強さを感じました。日本人にはない“必死さ”というか、失敗や負けをパワーにするそのたくましさは、彼らが直面している苦難に

よって育まれたものなのかもしれません。

自分の目で現状を見たことで、この国のさまざまな課題と可能性を見いだすことができました。現在はJICAや日本大使館の方々とは意見交換しながら、スポーツ・アカデミーの設立に向けて本格的に動き始めています。スポーツだけでなく、社会的な価値を教える授業も同時にできるようなカリキュラムをつくるのが目標。日本企業と協力して日本への研修のチャンスもつくり、両国の若者の交流なども実現できればと思っています。

民族融和と一言でいっても、そう簡単なことではありません。でも僕自身が懸け橋となってボスニアに生きる人々がつながり、世界で活躍できる人材が育ってくれればと思っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索

